

# 第 78 回紫友まち歩き

## 迎賓館のまち歩き

秋雨と台風に悩まされたが、当日の天気はまずまずの様で、小雨が時々降っているだけ。迎賓館の中での見学が主なので問題ないだろう。館内は「花鳥の間」「彩鸞の間」「大ホール」「羽衣の間」の順で回り、外に出て「主庭」から「前庭」を経て「正門」から退館。その後、四ッ谷方面の方々と別れ、赤坂見附方面に歩く方は紀伊国坂を下りながら途中で「東門」を見ます。所要時間は、長くても 2 時間です。

日時： 2017 年 10 月 28 日(土)

集合時間：14 時 30 分

集合場所：赤坂離宮迎賓館西門を入れて手荷物検査場を通過し入館料を払って出たところで集合

参加者：17 名参加

案内人：荻原 018A

懇親会：六本木「サテンドール」

懇親会参加者：13 名

歩いた歩数：9,000 歩

### <まち歩き>:

#### ■まち歩き行程

赤坂離宮迎賓館西門→花鳥の間→彩鸞の間→大ホール→羽衣の間→主庭→前庭→東門→多摩堤通りから、六本木「サテンドール」懇親会

### <スタート>

今回は迎賓館の建物の中の写真は禁止されているので、外観だけの写真になります。なお、館内の説明は内閣府の迎賓館のホームページから抜粋です。解説>で示す。

#### ① 赤坂離宮迎賓館西門：

少し早めに正門の写真を撮る。



正門からは入場できず、西門からだけの入門。



解説>東宮御所の正門として、本館と同じく明治42年に建設された。菊の御紋章を掲げた正面扉と、両脇の小扉までの部分は、明治39年8月にパリのシュワルツ・ミュラー (Schwartz & Meurer) 社から、購入した。

見学前に、案内人の説明を聞くためのイヤホンを各自耳に合わせる。



案内人の最初の説明は、アカンサスの葉を示して、これがいろいろの場所に装飾として使われているという。



## ② 花鳥の間：

「花鳥の間」は、天井の36枚の絵、欄間の綴織、壁に飾られた七宝焼きが、花や鳥を題材にしていることに由来。室内の装飾は、16世紀半ごろのアンリー二世の時代を中心としたフランスの建築様式で、ルネッサンスの影響を受けたアンリー二世様式。国産の樺の柱に、壁板は木曾の塩地材（モクセイ科）が張られ、他の部屋と比べて重厚な感じのする部屋となっている。130人までの会食が可能で、地下の厨房で作られた料理が配膳される。窓掛けの刺繍のビロード地、板壁に張られた30枚の花鳥がデザインされた大判の七宝焼きもこの部屋の見どころの一つです。

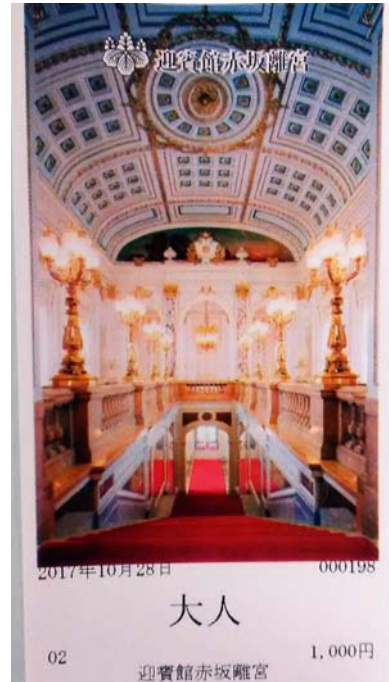
## ③ 彩鸞の間：

「彩鸞（さいらん）の間」は、暖炉の両脇や大鏡の上部に飾られた「鸞」と呼ばれる鳳凰の一種である霊鳥から名づけられた。部屋の広さは約160㎡で、天井が高く（約9m）壁にはめ込まれた10枚の鏡が部屋を奥深く、広く感じさせる。部屋の装飾は、19世紀初頭ナポレオン一世の帝政時代を中心にフランスで流行したアンピール様式。天井、壁、柱などには、石膏金箔張りレリーフで構

成された、天馬、甲冑、武器、楽器などの華麗な装飾が施されている。

## ④ 大ホール：

入場チケットの写真は、大ホールからの入り口の緩やかな中央階段。左右の壁面には、小磯良平画伯の絵画と音楽の油絵が飾られている。



## ⑤ 羽衣の間：

謡曲「羽衣」の景趣をフランスの画家に描かせた天井画に由来する。部屋の広さは約330㎡で、天井の高さは7.4mと迎賓館では東側にある「花鳥の間」とともに最大の部屋。部屋の装飾は、フランス18世紀末様式を取り入れた白壁と金箔に深紅の色使いで、直線的で明快な構成となっている。壁飾りやシャンデリアには、音楽を題材にして、楽器のほかに仮面や花かご、リボン等がモチーフに用いられている。

## ⑥ 主庭：

外はまだ小雨。主庭からの建物と大噴水を見る。





平成 21 年 12 月 (2009 年) に 本館、正門、東西衛舎、主庭噴水池、主庭階段が重要文化財、国宝に指定された。

⑦前庭：

玄関の飾りにの 16 枚の花びらの菊の御紋や五七の桐について説明してくれた。



ここで集合写真を撮る。



きれいに黒松が植えられている。



正門から出る。ここで一部の人は四ッ谷駅に向かう。次は懇親会上の六本木に向かう。

⑧東門：

途中、外から東門を見る。



赤坂駅でさらに懇親会に行かない人は分かれる。

⑨「サテンドール」懇親会

ここから参加する人もいる。仲間の歌を聴きながら楽しみました。

お疲れさまでした。